

懇談会：「国土計画考」 - その10 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成18年8月30日（金）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

A氏 では、よろしく願いいたします。

今野 夏休みで時間があつたものですから、大部の資料を用意できましたので、お手元にお届けしました。

最初の図面は、この前、ご質問がありまして議論したときに出てきた「五畿七道」の図面です。統一国家ができてこういう地域区分をしていたということで、五畿というのは、畿内の5カ国です。下にあります図面は、東京書籍の教科書の類いですが、子供たちが使う教科書ではなくて、先生が使う教材です。

統一国家ができる前後、大和朝廷の力が北にどんどん延びていったという話をしたときに、多賀城の位置づけなども話しましたけれども、それを年代別に書いてあります。多賀城と出羽柵、いまの庄内を結ぶ線は、750年頃には大和朝廷の統治下に入っていて、それがどんどん北に延びて行って、850年頃にはいまの盛岡の志波城、それから秋田城を結ぶ線からさらに北に行っている。こういうことが図面でおわかりいただけようかと思ったわけです。

その次をめぐっていただきまして、三大航路と五街道がございます。こっちは子供用の教科書に出ていたものでございます。大坂の湊を中心にして海上交通のネットワークがつくられまして、江戸を中心として五街道があります。奥州街道、日光街道、中仙道、東海道、甲州街道とあります。中仙道が、前のページと比べていただくとわかりますが、江戸ができたために上野の国から急に南に下りて、ルートが変わったわけです。そのかわり江戸から真っ直ぐ北にのぼる奥州街道がつくられる、こういうふうに江戸を中心にした放射状に変わったわけです。したがって統一国家時代のものは、鉄道の線名で言うと、仙台から東北線で小山まで来て、両毛線で高崎へ出ていくというルートです。それが

本来の東山道です。

A氏 長野から京都、大阪というのは、一回、山梨のほうを回って行ったんですか。

今野 いえ、回っていきません。長野からは、木曽福島を通過して岐阜・中津川に出て、それで米原へ出ていくわけです。

A氏 この道ですね。

今野 ええ。名古屋に出ないで岐阜へ行って、岐阜から米原へ出ていくわけです。したがって、いまの東海道新幹線とか、鉄道の東海道本線は、本来、米原から先は中仙道沿いなんです。東海道は草津から分かれて行く。鉄道で言うと、草津線という単線のローカル線があるんですけども、それが本来の街道としての東海道です。

それから、「鎌倉街道」の資料は神奈川県史からとったものですが、図面が出ていましたのでコピーしてまいりました。鎌倉に対する放射状の路線が東国全域にネットが張られていまして、「いざ鎌倉」というのはこの道を来た、こういうことです。

いまでも断片的にこれが残っていて、部分的には現在の道路にそのままなっているところもあります。地名で鎌倉街道というのが残っているところもありまして、私の家の近くでは、左から2本目のところに関戸（府中関戸）というのがありますね。府中はいまの府中です。中央線の国分寺。関戸は京王線の聖蹟桜ヶ丘で、あそこには鎌倉街道という名前がそのままあって、鎌倉街道交差点という信号もあります。

A氏 いまの16号線というのはもう少し外側ですか。

今野 16号線は八王子を通っていますから、お城で言うと、永林寺、それから滝山城、これの左側です。

A氏 もっとずっと遠いんですね。

今野 はい。これの一番端っこに五日市がありますね。長房というのはJRの駅で言うと西八王子です。この鎌倉街道を見てもわかりますけれども、荒川、江戸川、中川、この湿地帯は空白地帯で、国府台のところの渡しでつながっていたと。これが伊藤左千夫の小説……。

D氏 『野菊の墓』ですね。

今野 あの渡しですよ。

D氏 「矢切りの渡し」。

A氏 この刀のところ、バツ印みたいところは戦争があったんですかね。

今野 そうです。小手指なんていうのは有名ですね。小手指の古戦場、いまの西武球場のところ。分倍は新田義貞と北条の大決戦場でした。

C氏 これは市原のほうに抜ける海上の道があったんじゃないですか。これはどこを結んでいたのですか。

今野 新井城というのがあるでしょう。この先端からです。あれは統一国家誕生前からのルートだったんです。一番前の地図を見るとわかるように、房総半島というの、下が安房、次は上総、下総。上総のほうが奈良に近いわけです。だから上(かみ)なんです。こっちのルートが本ルートで、武蔵というの

は、湿地帯と武蔵野台地の草原で歩けなかったわけです。

A氏 この頃はこの辺はもう湿地帯で、いまの状況とは随分違う状況ですね。

今野 そうです。地形的に言うと、台地から台地にいかに渡るかということですね。できるだけ湿地帯を短くと。それで市川と松戸の間の国府台が、こういうふうに一番取っかかりやすかったのでしょうね。

C氏 とにかく江戸城を決めてからは全く埋め立ての歴史ですものね。

今野 そうですね。江戸ができてから、前の2ページ目の図面で見るとより大きく変わった。

鎌倉街道の説明は、『全国古街道事典』というのを図書館で見つけ出してきてコピーしてきました。「絹の道」というのはいまの16号になるわけです。それから、「神奈川県歴史」という膨大な本が県から出ています。その中に「鎌倉街道の整備」という項目がありましたので、それをコピーしてきました。歴史の道にご興味のある方はゆっくりと後でご覧くださいませ(笑)、ということでございます。

次の資料は、政府の社会保障・人口問題研究所の京極所長からいただいた「都道府県の将来推計人口(平成14年3月推計)の概要」で、これは今年じゅうに、新しくもう少し精査された数値になるらしいのですが、ご参考までにつけておきました。数枚のレポートです。

3ページ目には「都道府県人口の増加率」が出ております。黒く塗りつぶしてあるところが人口増加率がマイナス2%以下で、いまの段階では日本海側ですが、ほぼ全土に広がるということでもあります。

D氏 都道府県で？

今野 都道府県単位です。

D氏 特異なところは何かありますか。

今野 これからいろいろな解釈ができますけれども、2030年では、人口減少率が低いところは、宮城、東京、神奈川、滋賀県、それから福岡県と5つに絞られてくる。やはり拠点都市型のところは抵抗力が強いという感じですかね。

C氏 滋賀なんていうのは、いまの趨勢値を伸ばした形になるんですか。

今野 いえ、これは全部趨勢値ですから。

D氏 いま、滋賀はすごく増えているんですね。

今野 人口問題研究所の推計ですので、政策変数は入っていません。

A氏 この平成17～22のところで、四国の西側というのはいつやっても減るんですよ。

今野 そうですね。

A氏 これを見ると、県単位だからそう出てこないのですか。

今野 四国だけではないですが、西南日本はそういう傾向が強いですね。京極先生なんかと別途、人口問題の勉強会に首を出しているものですから、精力的に解析してみたのですが、西日本と東日本で比べると、明治以降の基本的な動向が全然違います。西日本は、四国、それから中国地方、山陰なんかもそうですが、近代日本の人口増加に対してほとんど増加した人口を吸収していない

のです。慢性的に減少傾向があるということです。逆に言えば、近世からずっとそれだけ生活が安定しているのかもしれませんが。そんな大規模な減少にはならないけれども、ずっとだらだらと下がってくる。

D氏 あまり移動しないでも食べていけるということですか。

今野 そうです。そういう傾向が非常に強いです。

A氏 例えば日本海国土軸とか西日本国土軸とか、いろいろ数字をいじくりますと、山口は太平洋国土軸に入れなくて、日本海国土軸に入れたほうが数字がわりと落ち着くんですね。もう一つは、和歌山は昔からどうも近畿ではなくて……。

今野 南海なんです。

A氏 そうなんですな。

今野 統一国家のときも南海です。近畿じゃないんです。

A氏 四国・九州と一緒になんですよね。もう一つ、奈良まで和歌山とくっつけたほうが数字が何となくうまくいくんですよね。

C氏 吉野なんか全くそうだったからね。

今野 紀伊半島という形。

A氏 どうも近畿じゃないんですな。

今野 次のページは府県単位の一覧表です。その中から上と下、目立つところを取っているということです。先ほど申し上げましたように、都道府県人口とその割合というのは、2000年と2030年で、東京9.5が相対的に10.3に伸びるという形です。伸びるのは首都圏ですが、大阪は落ちている。まだ集積があるから6.5とって威張っていますが、落ちている。

その下の、ワーストと言うのかベストと言うのか知らないけれども、アンダー5はほとんど西日本の府県です。それは現在の高齢化社会とピタリと合っているということで、老年人口というのが下にありますね。

C氏 四国でどうして徳島が入って愛媛が入らないんですか。

今野 松山が少し頑張ってくれているのかもしれません。松山の集積力は四国の中では高松とともに大きいから。

B氏 県別で見るとこういうことになるんですけど、都市規模別の都市県単位で見ると、大きな中心都市があるところの人口の減り方は少ないんですね。中心的な都市がないところは大きく減るという感じです。だから、将来的に言うとなら全体で人口は減っていきますけれども、集積度はどんどん、どこかに高まるのです。人口研のデータでも市町村別の推計値があるんですけど、それで見ると、どんどん集積度が高まっていくという傾向はありますね。

今野 これを暇なときに見ていると、いろいろな解釈が出てきて頭がボケないで済みますね。

A氏 これは社会移動をあまり考えていないのでしょうか？

今野 そうです。逆に言えば、これからの国土の動きを見る一つのカギは社会移動です。だから、大阪が落ち込んできているのは、社会移動の力、プラス

の力がなくなってきたいる代表例だと思います。

A氏 でも、例えば高齢人口とか、いまのコHORTでやるとこうなっちゃうんですね。昔もそういうことが言われていたけれども、実際に東京というのは若い人を吸収する力が残っているわけですね。こういう延長線上で本当に行くのかどうか。

今野 そうですね。

A氏 社会移動だけは見通せませんからね。

今野 景気変動なんか直に受けますし。

A氏 人間の感性とかもわからないと。

今野 そうですね。年次別に見ても波打ってますから。

A氏 ただ、大阪は客観的に見ても難しいですね。

今野 そうです。大阪は相当基調が変わっている、こんなふうに解釈せざるを得ないです。

D氏 高齢者だけの移動みたいなものを書いたものはありますか。だいぶ前に読んだのでは、後期高齢者は大都市にどんどん移動していると、もう10年ぐらい前から言われていますね。その後、どうなんだろうと思って。

A氏 年齢別は難しいです。ただ厚労省の統計で、雇用の人間の移動というのは、IターンとかUターンというのは出るんです。あれは要するに雇用だけ

ら、年齢別が出ていないですね。

D氏 労働人口の世界でしかとらえられないですね。

A氏 そうですね。

今野 後期高齢者の大都市移動というのは、独居世帯になって生活できなくなって、息子のところにひかれていくわけですね。

D氏 そうです。もう10年以上前から厚労省が統計を出していますが、その後どんなふうになっているのか。

C氏 後期高齢者というのは何歳ですか。

D氏 75歳です。

A氏 年を取ると、いままでは大都市から地方のほうにという考え方でしたが、最近では、地方から大都市に集団移動している例もあります。大都市のほうで医療とかそういう体制がしっかりしているでしょう。しかも高齢者向けの施設等が非常に充実しているところに集団で移動しているケースもある。

今野 社会問題としては、息子にひかれて来るけれども、必ずしも100%息子に任せた状態で、合うか合わないかというのがあって、独居老人になっていく温床でもあるんですね。

D氏 都市独居になっちゃうんですね。

今野 それが特別老人ホームに入っていくわけでしょう。ところが、大都市

へ行っても、本当の都市部には特養の施設がつかれないから、その外側の東京大都市圏ではあるけれど、田舎に行くわけです。

A氏 群馬とか秩父のあたりというのは、すぐ特養ですね。

今野 高尾山の山麓なんか、特養の町みたいなもんですね。

D氏 青梅の都市計画マスタープランをやったけれども、あそこも山の中に行くと特養だらけですよ。

C氏 あそこら辺は墓地もついている（笑）。

D氏 しかも完全に山の中で、姥捨て山というのはこれを言うのかと思いますね。

A氏 高齢者になると、自分のふるさとに戻るとか、そういう話はどうもだんだんなくなってきたみたいですね。

今野 ふるさとと縁が切れますからね。僕なんかも典型例ですよ。いとこしかいないと、故郷に立ち寄りもしないですよ。

その次は、『人と国土』（国土計画協会）という雑誌から、「国土形成計画への期待」と称して注文をつけておいたものです。あとでゆっくりお読みいただければと思います。7月号に載ったものです。

次の資料は、この前の議論のときに出た貝塚の問題です。「縄文前期の関東平野」、貝塚の分布と当時の関東地方の海岸線というのを一つにまとめた文献を見つけました。『世界考古学大系』（平凡社など）から引用したという、教師用の参考書の資料です。貝塚はほとんどが当時の海岸線沿いにある、その一つが大森の貝塚であるという話をしましたよね。その証拠になる資料をつけてお

きました。

C氏 藤岡まで海ですか？

今野 はい。

A氏 グーッとえぐれているわけですね。

C氏 確かに江戸川、利根川、それが全部こっちにいつている。

今野 地質構造的に言いますと、関東平野というのは「造盆地運動」といって、真中が低く周辺が高い地質構造をしています。周りが上がって真ん中が下がる、こういう地球営力的な影響を受けるのです。非常に長期の目で見ると、それがいまだに働いているので、逆に言うと渡良瀬遊水池はそれが原因でできている。したがって利根川の堆積量はそこでマイナスを受け、河川の勾配はフラットになるんです。それで遊水池がいまだに残っている。それから関東大震災も、起きて10年後くらいしてわかったのですが、この関東造盆地運動が連動して動いていたようです。周辺が上がって真ん中が下がったという構造になっています。

D氏 神奈川県なんか随分隆起したんですね。

今野 そうです。江ノ島では、島の裏で大震災時に隆起したのが発見されています。それから犬吠埼。これは隆起しているんです。隆起して、長年、それが少しずつ沈下しているんです。それがまた、大地震でグッとそのときに一遍にリバイバルするという運動を繰り返しているのではないかというのが、地質学上での関東造盆地運動論というものでございます。

その影響を頭に入れてみるとこの図面がよくわかるわけで、東京湾の奥は、

渡良瀬遊水池までつながるどころまで海岸があったんですね。氷河期というのは4期ありましたが、その間が暖かい時期で、間氷期と呼びますが、暖かい時期は氷が融けて海水準が上がりますから、海水が陸地の中まで入ってきますので、「海進期」とも呼びます。その海進期の海岸線というのはこういう形で、いまの栃木県、群馬県まで東京湾が入っていた。それで、最後の海進期から「海退期」になって、東京湾がグングン小さくなっていったんです。ところが、最近の温暖化というのは、その時期が終わって今度は海進期になってきたのではないか、こういう説です。

したがって、源義経が平泉から黄瀬川へ出てきますね。あのときの記述から推定されるのは、東京湾の海岸線が、浅草が隅田川の河口、それが800年前です。400年前に徳川家康が入ってきたときは、永代橋が河口だったということです。それがさらに進んで、明治になりますと、河口が竹芝・芝浦になってくる、こういう形です。戦後はその先をさらに埋めたわけですがけれども、海退傾向というのを是認すれば、人間のやったことは小さな話で、この東京湾の大埋め立ても、100年早くしたくらいのことしかやっていないということにもなる。まあ、それは地球史的な目で見ないと何とも言えない話ですが。

それから、新田開発はどこだということですが、近世の開拓、新田というのは、全日本的に見ますと圧倒的に東日本です。特に関東もほぼ終わって、東北、新潟、これが中心だというのが一目でわかります。

西日本、フォッサマグナから西はほとんど江戸期の日本の大新田開発期 - - 新田開発が急速に進んだ時期と見られるときが何期かありますが、これは近世なので、享保年間に幕府から新田開発の勧めの布令が出ます。財政が困窮してきたこともありまして、幕府が新田開発に各藩はもっと力を入れるということによってやったわけですが、その時期の資料があって、この資料で見るとこんなふうになります。年次別にいくと、耕地面積というのが享保年間にそのために非常に進みまして、耕地面積が300万町歩の水準に達するということです。明治7年は305万町歩、収穫が3,162万石です。当時は1町10石（反当2俵半）ですから。それでほぼ3,500万人の人口、1人1石というので自給自足ができて

いたということです。

これ後ほどお話ししますが、享保年間に新田開発の促進ということがあって、結果として東北の開発が進んで、東北からの買米といいましょうか、仙台平野から江戸に大量の米が供給されるようになって、それが三大航路を支える。東周り航路を支える。こういう形になって江戸の町は経済的基盤が安定する、こういう相関関係を持っております。

A氏 これは米のイネの改良ですか、土木技術の改良ですか。

今野 土木技術です。イネの改良は明治以降です。

A氏 灌漑とか。

今野 そうです、低湿地干拓です。したがって主として用排水路の整備をするわけです。藩が食えなくなりましたから、侍を養えなくなりまして、伊達藩なんかもそうですが、足軽に湿地帯を与えて、自分の土地にしる、自分で食えということで半農型になるわけです。いわゆる「農兵分離」というのを織田信長がやって、それで強かったわけでしょう。各藩それに倣ったところがみんな強くて、倣わなかった長宗我部や武田は滅ぶわけですけども、江戸末期からは藩財政が困窮化して、プロの侍の数を少なくして農兵制度に戻っていくわけです。で、明治になって、農兵制度のやり方をそのまま北海道開拓に充てたのです。

A氏 伊達藩が裕福だったというのは、この辺でいくと、表面石高と実力とがだいぶかけ離れてきているんですか。

今野 伊達藩はちっとも裕福じゃないんです。ものすごく貧しかったといえるのです。伊達政宗時代はものすごく豊かだった。その豊かな経済は何だった

かという、金です。鉱山を持っていた。ところが、発掘し終わっちゃったんです。三代目以降は、そのくせに遊び癖だけは金持ち時代の生活から抜けないで、吉原を支えたのは伊達藩だと言われるくらい、あそこでカネを落としていましたから（笑）、困窮化してくるわけです。それでどうしようもなくなって、湿地開拓に本気になり出すわけです。

それは傾向としては徳川藩も同じですね。八代将軍吉宗の成功というのはそれなんです。四代将軍、五代将軍なんていうのは、犬公方みたいなのが出てきて無駄遣いばかりやっているわけです。ところが、財政のほうはその間にどんどん困窮化していった、こういうことです。だから、江戸中期の状況といまの状況は財政再建が叫ばれる等、ちょっと似ている感じもしますね。

C氏 先ほど、伊達藩は金でという話がありましたけれども、ああいうメタルの山や何かというのは全部天領にしたのではなかったんですか。

今野 いえ、全部天領にはできなかつたんですね。天領にしたところは佐渡とか石見銀山。だけど、徳川家康、二代将軍秀忠がそれに本気になって乗り出した頃は、伊達藩は、なくなってきていました。伊達にメスを入れても自分（幕府）の利益にならないものだから、そのままになります。

A氏 仙台にそんな大きな金山があつたんですか。

C氏 周辺にはあつた。

今野 東北は場所的にはあちこちにありましたね。こんなことを言うと東北人のマスターベーションなんですけど、日本国全体がすごく金持ちになって勢いがあつたときは、背後に - - 東北だけではないけれども、鉱山開発が当たつたときなんです。東北で言いますと、奈良の大仏ができた時代。統一国家ができて、あのときはものすごい勢いで盛り上がりました。その財で朝鮮半島まで

攻め入っていく。

その財力は何だったのかというと、鉱山で言うと、もういまや跡形もないですが、宮城県に涌谷（わくや）というところがありまして、新幹線の駅で言いますと、古川の駅から東、古川と石巻の間なんです。そこはいまでも、黄金狭間とか黄金山とか、地名が残っています。奈良朝はその金をあてたのだと思います。

C氏 いま、沖電気があるところですね。

今野 ええ。その頃、東北で金を当てたのが、もう一つは平泉ができるわけです。それから江戸時代の前、秀吉、織田信長、あの頃は金よりは銀があって、その筆頭が大田銀山。当時の統計からすると世界一の銀輸出国です。

C氏 世界遺産にしようとしているところですね。

今野 当時の世界は、銀本位制が確立する前は中国の力が強かったでしょう、近世までは。中国というのは金より銀が価値があったらしいんですね。だから、市場にわりに近いところで銀がたくさんとれた。それから、もう一つ銀で共通しているのは、スペインというのは銀を非常に大事にしたんです。ラテンアメリカでも銀山開発をものすごくやるわけですが、日本が銀がものすごく採れたというので、その世界経済に結びついたんです。それで織田信長にしても秀吉にしてもああいう豪華なことができたわけです。安土城をつくったり、朝鮮に征伐に行ったり、それから、ビロード製のコートを着てワインを飲んでいたとかね。

A氏 スペインというのはむしろ銀なんですね。

今野 そうです。ラテンアメリカはゼニも銀ですし、お土産物も銀細工ばか

り。

A氏 スペインがアルゼンチンに行ったんですが、アルゼンチンというのはアルゼンティーナといって「銀」という意味ですよ。銀が出るというので行ったら、銀はなくて水銀しかなかったらしいですけども。

今野 我々この世代の人間というのは、日本は資源に乏しいということでみんな共通意識はありますけれども、実は歴史的には、日本はかなり資源を輸出していた資源輸出国なんです。その資源を当てたときが国全体が豊かになってくる。

A氏 ただ、労働者をこき使ったものすごい勢いで掘り尽くしてしまったんですね。

今野 そうですね。それと地質構造的に言って、日本列島は大変動いていますから、規模がどうしても小さいんです。大規模なものはない。アフリカがいまだに資源大国だというのは、日本みたいに褶曲活動やら地球営力的な動きはないところで、何十億年の大地がそのままありますから、一回見つけたら規模はものすごく大きいわけです。その地質史的な背景が歴史に出ている感じがします。

それで、歴史の解析をする上で人口の問題をもう少し掘り下げないと議論にならないので、今日、新しいテーマに入る前に歴史の問題で時間を割いてくれとお願いしておいたのは実はそのためで、その基礎的な資料の一つがこれ（「日本の人口歴史的変遷」）でございます。これは、日本の総人口を縦軸にとりまして、下を統一国家誕生から今日までの1400年間を時間を横軸にとってみたものです。

人口統計が明確なのは国勢調査の始まった大正9年以降ですけども、その前に「国勢調査報告」ということで、森田優三という古い先生がいまして、日

本の人口推計を近世からやった人ですが、ほぼ信頼できる数字があります。1800年以降、19世紀半ばになると人口急増期に入ります。それは明瞭なんです。したがって幕末から人口急増に入ってくる。それ以前に人口について触れられている資料をまとめた論文がございまして、それを探り当ててグラフにしたんです。そういう作業をやったものがこれです。もちろん精度は落ちます。例えば9世紀の日本の人口でいくと、「古今戸口考」というので、人口は2,000万人くらいであったというふうに出ているのもあれば、700万人だったというのもあって、精度は数字的にはちょっと問題です。

それから、これらの文献のうちの多くのものが、新井白石も含まれますけれども、こういうことを記述している学者の文献が今日まで残っているのは大体江戸期なんです。江戸期に奈良朝時代には幾らあったとか、行基の時代には幾らあったとかいうのが多い。上に文献を書いておきましたけれども、本当の意味で文献がそのときに書かれたものとは信じないでいただきたいわけです。

その文献に書かれているものを今度グラフの上に落としてきますと、「室町時代は」という非常に長い時代を指していて、人口は何百万人くらいだったというから横に長くなるんですけど、これをおろしてみますと大体わかりますのは、10数世紀になってから人口は急増するわけです。そのベースが3,000万くらいだったというのがほぼわかります。その先はちょっと信頼がおけないのですが、次のグラフにちょっと飛んでいただきたいと思います。「総人口の推移」で、近世末期、17世紀くらいからのグラフを落としてみますと、初期段階ではそういう形で文献上の人口統計と合わないところがございますから、切れてしまっているところもあるのですが、続けられそうなところをグラフにいたしますと、こういう形で続いてまいりまして、19世紀の半ばから急増していることがわかります。同時に、19世紀前半はあまり伸びていないというのもこれでわかるわけです。

同時に、この解釈は、第二次世界大戦の人口への傷がいかにか大きかったかというのを読めます。それから、20世紀後半になってスピードがグッと落ちてくるというのを読めます。この動向は何かというのを議論しなければいけないわ

けです。この議論はもちろん個人でできる相談ではありませんで、いろいろな分野の先生方が本当はこのテーマについて議論を重ねていかななくてはならないのですが、ここで思い切りまして - - 私個人が思い切ったことはもちろんありますが、三全総を策定する際に人口に論拠を置こうといったときに、人口に論拠をおいた長期的な人口推移をコンサルに出したのです。そのときにコンサル側が出してきた報告書の中で、「人口は段階的に伸びているのではないか」という論が出ました。

ただ、これは世界的に発表できないんです。なぜかという、日本とヨーロッパはほぼその説が当たりそうなんですけれども、中国とアメリカ大陸はそのルールに乗りそうもないのです。アメリカ大陸は400年か500年しかありませんから一概には言えませんが、全く白地のところにたくさん人間が来て急増する一方なわけです。中国人口というのは、いまだに本当の数はわからないようなところですから、そんな解析ができる相談ではないんです。

そうすると、段階的にこういうふうに人口が急増した時期と、人口がさっぱり伸びなかった時期、急増した時期、これを思い切ってやりますと、日本に何回かの人口急増期があって、何回かの人口停滞期があって、それを何百年周期かで繰り返してきているということが想定されるので、あえてモードとしておいたわけです。

D氏 どなたか、「人口波動説」というのを書いておられる方がいますね。

今野 ええ、波動説は昔からあります。それとも一脈相通じる。そこで、下に「主な国土開発」というのを当ててきます。そうすると平城遷都、平安遷都、これは70年の差ですから、こういう大きな波動の中からいくと一つの波に入ります。古代日本の中では最大の土木事業、満濃池というのが四国にあります。あれができたのが821年です。それからそういう大規模な開発はなくて、1180年になると大輪田泊を平清盛がつくる。つまり神戸港です。この後、清盛は福原遷都をやるわけです。それから1232年に和賀江島、鎌倉の町ができ上がるわ

けです。同じような大規模な開発があったのがいつかという、1500年代の半ば以降に非常に多くなります。石見鉾山の開拓が始まったのが1526年、太閤検地が1590年、江戸市街造成が1603年、玉川上水が1654年。それで、最後の享保の新田開発令というのが1722年。

したがってこの200年の間というのは、土木史を読みますと、「世界最大の土木事業国家だった」と言っている人がいますけれども、そういう時期がありまして、これがどうも人口が急増している時期と合っている。それはどっちが原因かわかりません。人口急増に追われてこういう開発が行われたという解釈もあるでしょうね。したがって太閤検地などから、それ以前の日本の人口が1200～1300万くらいだったのではないかという推察ができるのです。

頼朝が武家社会をつくり出してきたときに小さな急増期があって、そして関東平野の開拓が進んで、鎌倉街道がつくられたりするのですが、それからの300年間くらいは、室町時代中心ですが、人口はあまり伸びなかった。そして、源平の騒乱期にどうも人口が伸びているらしい。平安時代というのも人口が伸びなかった。飛鳥、奈良朝時代になると、逆説的に言って人口は伸びたのではないか、こういう推察が起きるのです。

ところが、その下に「主な政治史」というのを並べますと、この人口急増期に日本の国土を中心として戦乱がひどいのです。それで、太平期になりますと戦争がないんです。江戸時代250年とか、室町時代とか、平安時代とか。

それで、「戦争はなぜ起きるのか」という話になってくるわけです。そこで思い切った推論が次の2枚をめくった表なのです。日本の人口を仮説として成長期と成熟期に分けて、成長期が3回か4回あった。成熟期もその間に挟まれて3回か4回あったとしますと、成長期は人口が急増している、成熟期は人口は停滞している。人口が成長しているときは、適齢期人口としては、成長期は戦争がこのように多いですから、男が死ぬんです。男の人口が少なくて女の人口が非常に多くなる。それで、結婚に対しての主導権は男が握る。つまり数が少ないですから。

成熟期になりますと、男は戦争で死なないですから、男の適齢期人口が多く

なるんです。ただし、全人口でいくとどうかというと、成熟期でも、女は昔から長寿ですから、したがって女が多くなる、こういうことです。

出生率はどうかというと、成熟期になると小さくなる、成長期は出生率が高い。社会的な扶養人口の比率はどうかというと、成熟期は年寄りが多くなって、老年人口率が多くなります。成長期は出生率が高いだけに、扶養人口は幼少人口が多い。こういう差になります。その結果、思想的には成熟期は保守的であり、成長期は革新的になる、こういうような傾向があるのではないか。

財政は、成熟期はいつの時代も財政は乏しくて、成長期は豊かである、こういうことになります。室町時代は、朝廷という日本の一大財閥は塀すら直せなかった。それで織田信長が直してやったという話があります。財政困窮であるということで、いま財政困窮時代に入ってきたということですね。

経済の主導分野はどこかかというと、成長期は次々と人口増加に対応しようとしますから、政策雇用を拡大していく。生産分野が経済の主導権を握っていく。したがって、設備投資が幾らされているかというのが経済の上では非常に大きな問題になってくる。設備投資の額によって景気変動まで起きる。こういう形になるのですが、成熟期になりますと、財政困窮で設備投資にカネが回らなくなってきて、経済の主導権を握るのは末端消費市場であるということで、個人消費が主導権を握り出してくる。そうすると基幹産業はどうかとなると、片や生産的ですから産業であり、片や金融型になってくるという形になります。

こうした動向は、当然、素材やエネルギーについては新技術と絡みまして、新しい素材が使われてきます。それは先ほどの歴史のあれでいきましても、近代はもちろん機械が入ってくるということですが、社会全体の視点に立ちますと、近世初頭の成長期は鉄が普及してくるということで、農機具などは鉄製、スチールになって、素材が変わるということになります。新しい素材と古い素材の戦いということになりますから、戦国大名の争覇でも、鉄を使ったところは強くなって生き残って江戸時代の体制に引き継いでいったけれども、使わなかったところは、長宗我部みたいに敗れて歴史から消えていく。

そして市場構造は、当然、成長期は売り手市場であり、成熟期は買い手市場

になる。市場の指向は、成長期は人口が増えて、とにかく腹を満たしたいもの
ですから量志向であるけれども、成熟期は質志向であるということになりまし
て、質が問われるようになってくる、ブランドが問われるようになってくる、
ということになります。

次に社会の動向はどうかというと、これだけははっきりさっきのグラフ
から言えますが、成長期は戦乱が多い、成熟期は平和が維持される。成長期は
なぜ戦乱が多いのかというと、新しい技術や新しい経済のこういう構造を背景
にして、新勢力が出てきて旧勢力との戦いになる。それに対して成熟期はカネ
がなくて進歩がないものですから、全員が旧勢力化する。こういう形で保守的
になってくる。そうなりますと、成熟期は未来に夢が持てないものですから、
未来に不安が出てきて、末世思想が支配的になり、その不安を解消するために
宗教が強くなります。成長期はどうかというと、新しく天下を握った人が先導
しますから、権力が強くなります。そういう形で権力対宗教の戦いがこの裏に
出てきて、これは日本だけではないような感じもいたしますね。政治は、成熟
期は保守的になり、成長期は改革的になる、こういう形になってきます。

社会の中で一番小さい家庭はどうかというと、成長期は男の数が少なくて女
の数が多いですから、基礎になる人間関係は男が主導権を握るから亭主関白に
なる。ところが、平和になりますと嬖天下になって、江戸時代などを見ると、
これは落語の世界ですが、みんな嬖天下である。こういう形になるわけです。
人間関係も少ない方が実権を握る希少価値の法則が働くようです。

社会心理はどうかというと、顕在的になるのと、潜在的になって潜っていく
ものがあります。国民欲求は、片や物質文明化するのに対して、片や心を求め
ていくようになって極楽浄土を求める。こういう形になります。

したがって、国民志向は成長期は社会的になって、「お国のために」となっ
ていく。これは奈良朝、統一時代から防人が誕生して、全国から国土防衛に人
が行っていたというものですが、いまや個人的になってしましまして、国のこ
とを論じるやつは国賊以外の何ものでもない、こういう形になってきている。
個人優先ですね。

その結果、国勢というのは成長期は外に向く。統一国家成立期の古代の成長期には、朝鮮半島の南部はほとんど日本が占拠していた、あるいは出兵していた。ものすごいですね。歴史を見てびっくりしましたけれども、最後、白村江の戦いで敗けてから手を出さなくなったわけです。もともと朝鮮半島、韓国は、中国の属国でもあると同時に日本の属国だったと言ってもおかしくないのですが、いま、そんなことを言ったら大変な話ですけれども。

A氏 白村江の前までは結構日本は朝鮮に出ていたんですか。

今野 古代史を見ると、何百年かにわたって日本は出ています。

B氏 日本人自体が向こうから来た人なんじゃないですか、そもそも。

A氏 我々はいつも、常に向こうから人が来ているというので、こちらから攻めていくとあまり思っていなかったのですが、それが白村江で……。

今野 それで、長尾先生という先生は僕らが随分ご指導いただいた先生ですが、面白いことを言っていて、日本人は海女族と山族、その2つの遺伝子を持っているのではないかと。それで、成長期には海女族の遺伝子が表に出る。倭寇なんかでもそうなんです。近世初頭の日本の人口急増期と合っているんです。それから明治以降、海外にばかり目を向けて、国土防衛もしないのに海外展開して関東軍が実権を握るというのも、外向きばかりだったんですね。その周波が人口の影響と絡んでいるのではないかと。

いまは、言うまでもなく成長期から成熟期へと転換する時期ですから、戸惑っている状況ですね。

A氏 人間もほかの動物も、オス105対メス100ぐらいというのが自然の摂理で、オスがそれ以上大きくなると戦争が起こる。どうも最近、男性と女性の生

まれる割合がかなり近くなっているらしいですね。

今野 近くなってはいますが、いまだにまだ男性が多いですよ。

A氏 男性が多いというのは全動物を含めてですけど、少しずつその差が縮まってきているようですね。

今野 そうです。ピッタリなんです。性比の問題。この研究をやらないと、あまり大きいこと言えないんですね。

A氏 どんどんやると、最後は神の摂理になっちゃうんですね。

今野 そうです。神の摂理なんです、これの言い逃れ場所は（笑）。

A氏 宗教のところもそうですね。

今野 近代化から足を洗う形になる。

A氏 ローマ帝国でも、権力が衰退したときに宗教が生まれてきていますね。

今野 だから、近代とは何かということで日本の乳児死亡率も調べたんですけども、乳児死亡率がものすごく落ちています。したがって105対100の性比から見た出生児性比率というのは、少しずつ縮まっているけれども、まだかなり差がある。それはなぜかということ、差を否定することは非科学的なんです。男は染色体数が奇数、女は偶数でしょう。したがって男女に分かれている動物は、例外一つなく、男が短命で女が長命なんです。男が弱いわけです。弱いというのは何かということ、早死する。早死の主体は何かということ、一番抵抗力のない生まれた直後なんです。したがって新生児死亡率と乳児死亡率というのが、実

は解くカギになるんです。これが近代科学で死ななくなってしまったのです、本来死ななくてはいけない男が死ななくなっている。

その結果、結婚適齢期になってくると男が余っているんです。その結果、社会は女性型になるんです。女性型になると戦争はやらないわけです。井戸端会議や裏で悪口は言うけれども、表立って喧嘩はやらない。文化型になるんです。だから、昔から見たらものすごい文化型になって、芸術や音楽がものすごく盛んになるわけです。いま、ピアノだのバイオリンを習っている人口は、全国で自衛隊の何十倍いますかね（笑）。

D氏 しかも女が支えているんですよ。

A氏 我々は人間というのは長生きするものだと思っているけれども、この前、鳥取藩の歴代城主の墓を案内していただいたんです。このときに何人生まれて、誰は何歳まで生きたかというのが全部書いてあるのですが、とにかく10歳まで生きることがいかに難しいことか。それから、大名になっても20代の前半くらいでみんな死んでしまっているんです。あれは一つは鉛の影響もあるでしょう。大名たちの乳母の化粧の影響もあるかもしれないけれども、とにかく生きるというのが難しいか。だから、跡を何とかつくることが大変な事業だったということがよくわかりますね。

今野 しかも江戸という官僚都市は、参勤交代で男は大挙して地方から単身で上がってくるでしょう。だから、吉原とか品川の女郎屋がなければ江戸の平和は成り立たないわけです。江戸の都市計画の核心的な部分は、女郎屋をどう配置したかということだと思うんですけど、まあ、都市計画の専門の方の前でこういうことを言うのは恐縮だけど（笑）。

A氏 関西は吉原みたいところはなかったんですか。

C氏 あります。

今野 あのシステムがないと、江戸の町は喧嘩ばかりになるわけです。

B氏 男が過剰だったらしいですね。結婚できない男がいっぱいいて。

今野 そうです。男が過剰なるがゆえに、産業として新しく江戸の町ができてから出てきたのは外食産業やインスタント食品です。つまり寿司であり蕎麦であり、外食産業なんですよ。いまの外食産業の原点は、江戸の参勤交代によって支えられた男性都市に在りなんです。

A氏 いまの内閣の少子化の対策があるでしょう。あれで見ると、猪口少子化大臣に対して委員がいま反乱を起こしていますね。考え方がおかしい、ただ予算をつければいいというものではないんだ、根っこを考えるべきだ、と。やはりこういうところの議論をしておかないといけませんね。

今野 こういう議論がどれだけ役立つかわかりませんが、こういう議論を全くなしで、カネだけやれば少子化は片づくなんて考えていること自体が、政治家としてはお粗末極まりないと思いますよ。

A氏 大臣のほうは予算獲得のために委員を使おうとしているけれども、そこで委員の人たちがみんな反対していますね。

B氏 逆に言うと、成熟期と見切ってしまうと、いくらやっても子供は増えないということになってしまいますね。確かに江戸時代の前半の人口急増期の後はずっと横ばいです。恐らくサチュレートしていて、日本列島で養える人口はあのとき4,000万弱ですから、そのぐらいが適当な規模なのかなと思うときがありますけどね。

今野 江戸時代になぜ人口があれだったかというのは、これもいろんな議論があります。間引きが思ったよりも多かったのではないかとか、いろいろありますけれども、どうも、もっと大きな摂理が働いている感じもします。

A氏 いまの条件で日本列島にどのくらい人が住めるかというのは、推計でもしているんですか

B氏 「いまの条件で」というのは難しいでしょうね。つまり交易を前提としていますから。

A氏 いまの経済社会の状態でということでしたらどうですか。

B氏 既に存在している1億2,000万人は可能ということなんじゃないですか。

A氏 少なくとも、1億2,000万人住めないから人口が減っているという話ではないはずですよ。

今野 こういうことを考えていると、やはり国土計画の時代は過ぎたんだなと思います。

B氏 確かに「開発」ではないですね。おっしゃるように、まさに成長期だから開発がメインであって、これからは開発の話ではないと思いますね。

むしろ、文化の時代とか環境問題とか、そういうところにシフトしていくんじゃないですかね、テーマ的には。

今野 こういうことをやっていると非常に興味深いのは、幕末にお伊勢参りの人口がものすごく多くて、3,000万人の人口なのに1年に100万人くらい行っていた、それから、踊りが流行ったでしょう。

B氏 「ええじゃないか」ですね。

今野 あの動員数もすごいんだよね。その辺の基礎的勉強をする必要がありますね。

D氏 人口波動説の本を読んだことがあって、結構面白かったですね。

A氏 いま、またお祭りが盛んになってきました。特に踊り系統。しかも、全員参加型のが世の中の風潮として増えてきましたね。

D氏 「YOSAKOIソーラン」が典型的ですね。

A氏 ほかのところも、高知の祭りだってものすごい人数がいるでしょう。阿波踊りはもちろんだけど、ほかのところも、見るのではなくて全員参加型の、しかも踊るタイプ。

今野 踊らないとダメなんですよ。踊らない祭りとして有名だった仙台七夕も踊りを入れるようになった。七夕の下で踊っているんです。

A氏 鳥取も「しゃんしゃん祭り」といって、踊る人が4,000人ですよ。

今野 一番下に「技術」というのを書いておいたのですが、技術の傾向が違って、成熟期には、どうも新しい技術が開発されないで、いままで開発された技術を組み合わせていく分野になってきているのではないかという感じがします。技術（科学に置き換えてもいいですが）は人間が一生懸命考えて実用化するから、ある意味では時間軸と関係なしに着実に伸びるんですね。伸びるんだけど、その社会的評価がされない。社会的評価が、成熟期なるがゆえにされなかった最も典型的な学者が関孝和ではないか。微積分を世界最初に

考え出しても、誰も評価してくれない。同じことは、華岡青州の話だとかいろいろありそうな感じがするんですよ。

D氏 その時代というのはある種の閉鎖社会で、一方で成長期の国があったから、話はもっと複雑でしょうね。

今野 この中に「伊能図完成」というのがありますが、伊能忠敬の日本列島の図面ができたのは1814年なんです。『四千万歩の男』という井上ひさしの小説を読んでみてハッと思ったのは、伊能忠敬が50年前にあの図面をつくっていたら、場合によってはあの図面は社会に出なかったかもしれないなと思ったんです。そのきらいは、あの図面が完成したときに、伊能忠敬が死ぬ前は全然評価されなかったというのと合っているんです。

ところが、この直後に外敵が出てくるんです、ロシアとかペルリとか。それによって一挙に花開いて、伊能忠敬はいままでいけばノーベル賞ものだとなっているのも、どうもその辺なんじゃないかなという感じがするんです。

A氏 伊能忠敬がつくったときには地図の必要性があまりなかったのですか。

今野 あまりなかったということです。だから、幕府の中で極秘扱いにされていた。彼は図面ができて2～3年後に死んだでしょう。ところが、死んだ後に北方領土を荒らしにロシアが来るわけです。

A氏 やはり国を守るために、自分の国土がどうなっているかというのが必要になってきたんですね。

今野 ええ。そういう個人的な感じもちょっと持ちました。

D氏 伊能図は外国のほうが興味を持って、疑獄事件が起こるわけですよね、

持ち出して。

B氏 シーボルトですね。

今野 既に帝国主義化してきている。成長期に入っているから。

D氏 別に伊能は、そういう世界を見てつくったわけじゃないんでしょうけどね。

今野 先週の新聞で私個人として感動を覚えたのは、いままで小腸というのは内視鏡が入らなかったのですが、先週の新聞で、内視鏡が小腸に入ることに成功したんです。これから小腸の病気はすごく治療しやすくなる。

どういうシステムかというのと、何のことはない、いままでの内視鏡にカプセルをかぶせる。それに気づいた人は偉いんだけど、カプセルをかぶせるから、グニャグニャに曲がっている小腸の中に入っても傷つけないでどんどん進めるようになった。考えてみると、極めて単純な話なんです。つまり技術は、新しい技術ではなくて、組み合わせ技術化してきている。

B氏 本体が小型化したからということもあるんでしょうね。

今野 もちろんそうです。小型化してから何十年かたって、小型化の開発が限度まで来て応用編がパッと出てくる。

C氏 いまのトヨタにしる何にしる、あれだけの生産能力を持ったというのは、もともと使っているハードは昔から同じで、プレスしたり切ったりというものでしょう。だけど、その組織化の技術が違うからあれだけの競争力を持つわけで、いままで、ハードと結びつかないと技術と見られなかったものが、そうではないところのウエートがすごく高くなっている。いまのIT化の問題や

何かもそうだけど、社会組織そのものの中でそれが大きくなってきている。これを応用と言うかというのと、僕は、それは応用ではなくて創造だと思っています。それが社会を変えている。だから、この成熟と成長の分け方の問題も、これは大変面白いんだけど、もう一回よく考えてみる必要がありますね。

今野 いや、これはもう極めて大胆なもので、仮説の上の仮説の推論を前提にして並べましたから。

C氏 大変面白いですけどね。

D氏 この土台から話を展開すると面白いですね。

C氏 成長から成熟へ転換し、成熟からまた成長に転換する。そのパターンが幾つも起きているわけですね。そのきっかけは何かというところがポイントですね。

今野 欲求不満の蓄積の量ですよ。ええじゃないか踊りなんて、完全に欲求不満の解消策だと僕は思っているんです。最近、踊りが多いというのも欲求不満でしょうね。欲求不満になってくると、非常に極端なことを言うと、その一つひとつが引っ繰り返ってくるわけです。一つひとつ引っ繰り返って、それが多数になってくると新しい勢力が出てきて社会的勢力になってくる。それがまた天下を取るまでに百年かかる。それが戦国時代の応仁の乱から始まった百年間の戦乱であったり、古代の戦乱であったりしているのではないかと。

A氏 ガルブレイスの『バブルの物語』を見ると、人間というのは欲求が常にあるんだけど、自制的にそれを抑えていて、それが一定の周期ごとにポッと出てくる。それが、例えば昔は「黒いチューリップ」でバブルが起こったり、建物を買うという形とか、何かそのときのものでパッパッパッと出てくるとい

うのをガルブレイスは書いていますね。

今野 そういうメカニズムが、何となく人間社会に働いているのではないかという気がするんですね。

A氏 何かあるんでしょうね。少なくとも人間というのは、50年も100年も欲求をずっととどめたまま、例えば消費を節約するという形では絶対にいかなはずだと思います。どこかでガス抜きが要るんですね。

今野 最後の「江戸時代の人口」、これも先生用の教科書「日本史総覧」というのがありますが、学校教育で公に副読本の資料として出ているものです。これを見ましても、江戸時代の人口は、1720～1730年を境にしてあとは全く伸びていない。その中で京都と大坂の人口が、ちょうど日本の人口が停滞し出してからすごく減少しているんですね。これは一体どういうことなのか、一回、関西で歴史をやっている人と意見交換をしておく必要があるなと思っています。江戸だけはいまの東京の人口の伸びと似ています。

D氏 一極集中型ですね。

今野 以上が、前回の歴史の議論をやったときの補完資料としてつけたものです。

A氏 江戸時代の江戸というのはどのぐらいの人口だったのですか。

今野 100万人と考えていくといいのではないのでしょうか。ただ、明治になって初めて調査したときは80万人に減っています。それは、参勤交代でこっちに家族や何かが押しつけられていたでしょう。それをみんな引き揚げたこともあったんでしょうね。

D氏 100万人というのは世界一ですね。

今野 世界一ですよ。1600年代、ロンドン、パリは40～60万です。で、これは「町方のみ」ですから。これに政治的な武家人口がありますからね。

D氏 武家人口のほうが多かったかもしれませんね。

C氏 町方のみというのはどんな統計ですかね。

D氏 人別帳みたいなものを足していったんですかね。

今野 「三都人口は中部よし子『近世都市の成立と構造』」、これからとったものです。出典が出ているから、ある程度信用していいのかなと思いました。全国人口で武家人口は約500万ですからね。ここに書いてありますが、江戸も武家人口など約50万人加えれば100万人を超えると。

A氏 大坂は明治維新のときは20万人ぐらいになっていたんですね。

今野 すごい衰退ですね。最盛期に比べて人口半減ですものね。

A氏 明治維新のとき、銚子（千葉県）も20万人近くいたといいますね。

今野 島根県の大田が最盛期人口20万です。それから三大外様の城下町、仙台、金沢、鹿児島、これは5万です。

D氏 そんなものですか。

今野 ええ。3,000万人口時代で、5万。

A氏 吉田さんが、明治維新のときの関東の人口で1位が江戸、2位が横浜、3位が銚子か桐生とおっしゃっていました。

今野 そうです。桐生はすごく大きかったんです。

A氏 こういう人口学というのは、いま、ちょっと廃れているでしょう。要するに推計がコーホートばかりやって当たらないものだから。

今野 人口学の大部分が、私の出身母体の地理学もそうなんですけど、ザイン・ヴィッセンシャフトでしょう。こうでありました、こうでありました、だけだから、国勢調査員と同じレベルなんです。

A氏 それを伸ばすだけなんですネ。

今野 人口問題研究所自体もそうなんです。政策的なことを言うと逃げるわけです。性差係数をどう加えていただけるかはそちらの問題ですからといって。

A氏 本当は人口問題を厚労省が持っているのがおかしいので、内閣が持たなければいけないわけですね。そもそも人口をどうするかとか、背景をどう考えるかというのは政府全体で考える必要があるのではないのでしょうか。

今野 そうです。あんなのは内閣だと思っんです。

D氏 だけど、人口をどうするかについては、戦時中の産めよ増やせよの政策の問題があったので、一時、タブーだった時代があったと思いますね。

今野 それはありますね。あのときはあまりにも介入し過ぎて、10人以上産むと総理大臣賞だと。

C氏 いま、中国は一人っ子政策をやっていて、先行きどう考えているんですかね。

今野 いや、あれは大変ですよ。日本どころの騒ぎじゃなくて、急坂を転げ落ちるでしょう。一党独裁社会といえども、政策を途中で変えてもそんなに動かないですよ。

D氏 人間のほうはね。生物ですからね。

今野 時間がありませんので、歴史の補完はこの程度でいいですかね。

A氏 そうですね。

今野 いま配ったのは、29日の『交通新聞』に出ていたものです。これからの国土形成計画の予定が新聞に出ていたので、コピーしてきてだけです。来年の夏に全国計画を策定して、それからさらに1年かけて各地方計画を策定する予定だということです。それだけの話です。

A氏 さっきいただいた今野先生が書かれたもの（資料「国土形成計画への期待」）で見ると、表題だけしか見ていませんが、「フレームの早期提示」と書いてあります。ここでおっしゃっている「フレーム」というのは全国計画のことなのか、それとも前提となるフレームですか。

今野 私がここで書きましたのは、全国計画についての期待というか、注文という形でまとめたのですけれども、主張していることの一つは、全く全国計画が盛り上がっていないのです。というのは国民世論になっていない。全国民の共通問題なのに国民世論になっていないというのは、あまりにも官庁密室主義なのではないかということなんです。

それを助長しているのは、経済計画がなくなったでしょう。昔から、全国総合開発計画というのは経済計画と車の両輪と言われたわけです。極めて理解しやすい説明をすれば、経済計画が全国フレームを出して、それを受けて日本列島にトレースするのが国土計画と、我々はこういう解釈をしていたわけです。経済計画がなくなったために、そのフレームが出なくなってしまったでしょう。それにもかかわらず全国土の計画を立てるとすれば、経済計画の代わりに少なくともフレームとして、長期計画ですから、日本は30年後、50年後にこうなりますよというのだけは国土計画側が国民に出さない限り、国民は意見の言いようがないだろうと言っているわけです。

A氏 一全総、二全総は経済のフレームだった。三全総は人口フレームですね。今度のそのフレームの軸は何ですか。

今野 それも出していないわけです。そういう大問題があるのに、それすら出していない。それでは国民側から意見を言えといっても、言えない。新聞記事にもならないから、ますますならなくなる。

A氏 さっきのこの表かもしれませんが、フレームというのは。例えば社会の活力とか、もう一つ新しいフレームのアイテムが必要ですね。

今野 ええ。国民が何を求めているのか、国民側からは出ないわけですから。

C氏 それがはっきりしていないし、地方分権化して、地方が何を欲求しているかというのもなく、なおかつ、公共投資は何%減らそうかという議論だけがある。

今野 そういうことです。だから、国民の不安はなぜ起きているのかということも書いておいたんです。国民は何となく将来に不安を感じている。それは

出し方によってはワッと乗ってくる話なので、マスコミをもっと使う必要があると思います。新聞記事にすらならないわけです。僕が三全総をまとめて新聞発表するときには、新聞社が75社来て、中身をまる一日かけて説明したわけです。それで明日の朝、解禁とかやったわけです。

A氏 例えば北ヨーロッパの場合の国家目標のフレームは、明らかにウェルフェアですよ。

今野 そうです。そのコンセンサスは、フレームを出して、いまのまま行くと日本はこうなるよ、そうじゃなくて、こういう日本にしないでいいのではないかと、というところまで作成者が出さない限り議論にならないと思います。そのときに国民は、いや、そっちの方向じゃなくこっちの方向だ、こういうことになって上と下との間で議論の交流ができて、それによって政策の基礎が決まると思うんです。それがひと言で言えば、高度成長だとか、ウェルフェアだとか、こういうことになるわけでしょう。

A氏 ここに書いてあるのはまさにそうですね。

今野 かなりきついことを書いたんですけどね。広域地方計画の圏域ばかり議論しているのは、何の意味もないのではないかと書いたわけです。

C氏 本当にそうですね。

今野 次に、国民欲求がどうなのかというのは、実は僕はこの宿題をこなすために直接国土計画局へ行って議論してきました。率直に言いまして、ごめんなさいなんです。2枚のグラフ(資料「個人の多様な満足を實現する多様な地域の存在」)を見てください。政府が国民に対して、国土計画の基礎になる国民欲求がどう変わっているかというのをずばりやっている資料で、しかもス

ポットものではなくて、歴史的に毎年ちゃんとやっているのはこれしかないんです。

A氏 これは何の調査ですか。

今野 「国民世論動向調査」と言います。昭和47年からずっとやっているんです。設問も動かさないでやっています。したがって、これも次の計画で政府側の説明資料に出てきます。

「心の豊かさ」と「物質的な豊かさ」では、かつては物質的な豊かさが上回っていたのですが、第一次石油危機を契機にして、一時、混迷期があって、それを抜け出してからは心の豊かさが圧倒的に伸びてきている。物の豊かさは国民欲求としては求めないということになって、いまや半分を切ってしまった。ただし細かく見ると、昨今、心の豊かさが落ちてきている。

A氏 本当ですね。

今野 この数年ですね、景気が回復基調になったら。この動向を基礎にした論理展開はいたしませんということは、計画課長と計画官が両方言っていましたから、僕は内々の議論を彼らの机の前でやってきました。それで、「先生、少しは役に立ちますかね？」と行ってよこしたのがその前のグラフなんです。ニュースによると、マルチハビテーションを出そうとしているのでしょうか？ それの論拠にできるかできないかということで、「理想の居住地域」の調査をやった。全国の都市を三大都市圏、地方圏は中核都市、中枢都市、地方圏のその他の市町村。小さい都市に対する理想の居住地域の評判が非常に高くなっているので、「2地域居住論」というのを出そうかなということをいま検討しているということがあられるわけです。

それから、「日本の国や国民について誇りに思うこと」という質問については、「長い歴史と伝統」「美しい自然」「すぐれた文化や芸術」というのが圧倒

的に多くなってきているというので、文明型・物質型のものよりは、文化型・心（こころ）型のもが増えているということの論拠にしたいのですね。まあ、関係あるといえばあるけれども、直接論拠にできるだけ強さがこの調査自体にあるかどうか、というような問題があるのではないかという感じだと思います。

率直に言って、僕も非常に悩んだものですから、何を議論の素材としてここに出してきたらいいか。何にもなくてもあまりにもと思って、国土計画局計画課の課長と計画官に、ちょっと遊びに行くから時間くれと行って議論してきたら、彼らから出してきたのがこの2つです。実は資料が少なくて本当は困っているんだ、ということも泥を吐いていましたけどね。

C氏 これはどういう調査ですか。

今野 委託調査みたいな形で外へ出してやっているのでしょうか。

A氏 「長い歴史と伝統」「美しい自然」「すぐれた文化や芸術」、これが非常にウエートが大きくなっていますが、三全総あたりでもこういう意識があったのですか。

今野 いや、こういう単純な聞き方をしたら、いつの時代もこういうふうになるんですよ（笑）。

A氏 なるほど、そうですね。

今野 「すぐれた文化や芸術」が、よりすぐれていったほうがいいというのは百人中百人思っているわけです（笑）。ただ、それだけで条件になると……。

C氏 ここに書いてある項目の国際比較みたいなものが、つい最近、新聞に出ていたでしょう。

今野 そうですか。気がつきませんでした。

C氏 たしか最近だったと思うな。で、どの順位にしても日本が著しく低いんです。

A氏 「国民の勤勉さ」というのは、日本人は儒教精神でコツコツ勤勉だというのは我々も思い込んでいるわけですがけれども、最近読んだ本では、そもそも日本人はそんなに勤勉ではない。江戸時代とかを見ると、最低限生活できるだけのものを働いたらそのあとは働いていない。明治時代を見ても、そもそも日本民族というのはそんなに勤勉ではないと、結構実証的に書いてありました。

今野 いや、昔からそういう説はあるんです。というのは、一年待てば来年必ずだまってもコメがちゃんとなる。こんなに恵まれた国はないわけでしょう。それが国民性を育てたということですよ。

A氏 狩猟民族というのは毎日毎日捕まえていかないと、来年確実ということとは保証されていないわけですね。そういう風土といいますか、自然条件があるのかもしれませんが。

今野 そういう議論を真面目に始め出すと、和辻哲郎・司馬遼太郎型議論になってくるわけです。だけど、僕はあちこちで講演を頼まれて行くときに、「いま世界で一番の怠け者民族はどこか知っているか？ 日本だ」、こう言ってやるんですよ。土曜日曜プラス祝日というのは日本が世界で一番多いわけです。

C氏 そうですか？

今野 ええ。敬虔なるクリスチャンは、週休2日と日本で訳して土曜日曜休んでいるというけど、実は違って、日曜日は教会に行くために土曜日を休ませてくれと言ったわけです。ところが日本人は、お寺に行くのは誰か、いつか、何日行っているか（笑）。

A氏 特に我々の年代、昭和30年代から高度成長期というのは、工場労働者がコツコツ働いていて、そこで日本は持ちこたえていたというふうに思っていますけれども、ブルーカラーというのはそもそも流動性が激しい。昔で言うと石炭が典型ですが、食えればいいというのが原型であって、日本人の勤勉さというのはクエスチョンマークだなと最近感じますね。

今野 これは司馬遼太郎も言っていますし、米山俊直とか、梅棹忠夫とか、ああいう民族文化論というのでしょうか、彼らが共通して言っているのは米作の特異性ですよ。米作と労働力との相関関係を見ますと、米作というのはものすごく手がかかるわけです。それで、労働力を同じにしておいたらとれなくなるんです。ところが、一生懸命手をかければかけるだけコメがとれる。

しかし、今度コメが余分にとれたらどうするかというと、売る場がないから困ってしまうわけです。自分のうちで食う分はみんな自給自足でコメをつくっている。そのために、投下労働力とコメの実りとの相関のバランスの極めて狭い範囲に落ち着いて誕生したのが五反百姓だと。それがちょっと崩れるとゆがんだ形になって、足入れ婚だとかそういう形になって労働力を求めたりするということですね。

D氏 いまや米作は一番手のかからないものになっている。

今野 そうそう。投下労働力が一番少ない。投下労働力分の収入というと、

コメづくりというのはものすごく高いんですね。

C氏 昭和の初期まで農業というのは産業ではないんですね。

今野 産業じゃないですよ。あれを産業と訳したのが僕は基本的に間違いだと思います。これは近藤次郎が犯した罪ではないかと思う。農業という業にしてしまった。あれは「農事」なんですよ。それで、かなり遠慮して最初言っていたら、伊勢参りに行って暦を買ってきたんです。そしたら農業暦じゃないんですね。農事暦なんです。伊勢神宮という日本で一番信頼のおける暦の表題は農事暦。やはり昔から日本には農業という言葉はなかったんです。農事なんですよ。

C氏 今もってそうなんじゃないですか。

今野 それが近代ヨーロッパ文明の産業論が入ってきて、みんな農業に置きかえてしまったのです。そこに基本的な間違いがある。それなのに農業自体は昔のまま。

A氏 イスラムとか、まあ、キリスト教はだいぶ下がってきていますが、宗教が社会の中で非常に大きな地位を占めているところは、人々が何を望むかというのは答えは非常に簡単ですよ。日本みたいに宗教の位置づけが低いところについては、何を望むかというのは非常に難しいですね。基本的には何も望んでいないのではないかと、とも思えますね。

今野 ただ、時代の動き、社会が動くことによって国民不安が変形するわけでしょう。

A氏 そこなんですよ。

今野 それによって、宗教とか踊りとか文化が出てくると思うんです。私なんか日蓮宗だから日蓮の本を読んだりするけれども、日蓮みたいな激しい宗教家が出てきて住民を煽る。あれは住民不安を煽るわけです。それでこっちへ惹きつけるわけです。ある種の政治行動ですね。だから日蓮と鎌倉幕府は衝突するわけなんだけど、それが、司馬遼太郎に言わせる末世思想と微妙に絡みつくんです。将来展望ができなくなると不安が大きくなってくる。いま、その時代になっているのかなあという感じがするんですよ。将来に夢があるときは宗教に引きずられないんですね。

A氏 国際統計で各国に聞いているんですけど、その中において、日本人というのは最も不安を抱えている国民性なんですね。何について不安かというのは時代によって違うんです。例えば病気とか老後とか、いまで言うとそういうことが不安なんですけど、とにかく日本人というのは非常に心細いというか、不安な国民性というのは、国際統計を見るときにはなっているんです。

今野 それは否定できないでしょうね。そこは日本の社会が共同体社会で、これも米作と結びつくんです。これは米山論に偏り過ぎているのかもしれないけれども、つまり米作というのは一人ではできないんです。水の管理をしなくてはならないから共同体をつくる。そのために村ができたんです。ヨーロッパの村とか町は防衛のためにできたんです。そこは本質が違うわけですよ。それなのに、ここをまた同じ言葉に置きかえているところが基本的な間違いの一つだと思います。

C氏 その村落が崩壊し始めるんでしょう。

今野 そうなんです。サラリーマン社会化して崩壊し出しているわけです。水の管理を村社会がやっていたものを、いま国土交通省 - - というか農林省が代わりしているわけです。それで戦後50年来たわけでしょう。

A氏 それでいくと、日本人は何を望むかという設問よりは、「日本人は何について不安を持っているか」という設問のほうが正しくて、政治家というのは、何に期待を持たせるかというより、不安をいかに取り除いてあげるかというのが、日本の場合にはふさわしいのかもしれないね。

今野 ただ、今日みたいな考察をしてきますと、国に対する意識が、左が強くて右が弱いとすると、こういうふうに揺れ動くのだと思うんです、日本の社会というのは。いまはそういう意味では、国という社会の必要性、危機感が薄らいでいってみんな「個人」になってきている。だから、国がどうなろうとみんなあまり心配しない。北方領土なんか全然燃えないというのはその典型例だと思います。それでこの歴史の中で見ると、「国」ということが言葉に出てくるのは、古代のときと、元寇のときと、それから近代です。欧米帝国主義国家に囲まれてどうなるのか。最後は戦争に敗けてしまうわけだけれども。

僕は、司馬遼太郎の歴史観は右翼的だと左翼の連中は言うけれども、一面においては司馬遼太郎は筋が通った見方をしているなと思っているんです。彼は「くにあって国家なし」と言っているんです。これは彼の対談集の中に出てきますけれども、それは平仮名の「くに」なんです。つまり、伯耆の国あって日本なしということなんです。

A氏 国に対する欲求が低くなっているとすると、国土計画というのは余計そのこのところの位置づけが難しくなりますね。

今野 そうです。そういう意味では必要なくなっているわけです。それを揺らす危機というのは人口急増と防衛なんでしょうね。防衛上、危機があったときだけ国となってきた、全国から博多の浜に防衛に行くわけです。ところが、それ以外のときは、みんな、何で俺の国の兵隊が関が原まで出ていかなくてならないのか、となるわけです。

A氏 そうすると、国土計画をいま一番考えているのは防衛庁かもしれないね。北朝鮮が問題があって、アメリカの今度の在日米軍の司令の全体の仕組みが変わってくるでしょう。

今野 だけど、それは筋ですよ。外国の国土計画を見ても、防衛上の危機のときだけそれが表面化するわけですから。防衛上の幾つかの事例をずっと並べ立ててみて、防衛上の危機感がなくて国土計画的な発想をやった政策というのは「ニューディール」だけですよ。あれは防衛の代わりに世界不況ですね。

A氏 資本主義を守るための戦争みたいなものでしたからね。

今野 ええ。だから防衛上の必要もないし、人口が減少してきて、人が減ればこの日本列島は住みよくなると思っていると(笑)、国土計画が消されるのは当然ですよ。

D氏 一時、例えば防空計画というのでものすごく都市計画が進んだんですよ。

今野 街路計画とかね。

D氏 街路計画なんか、一時的に突然できたとかいうのがあってね。

今野 街路の幅なんてあれと絡んでましたね。

D氏 やはり防衛とか戦争というのは、いろいろな計画も進めることになるんですね。

A氏 ちょっと話は違うのですが、失われた10年とか失われた20年とか言い

ますね。この間、エコノミストが予測を間違っただけで経済の政策が失敗したわけですが、この間で都市計画というのはどう評価しているのですか。

D氏 「実は都市計画はほとんど無力だった」というのが、僕らの世代の評価です。経済の後追いで、いかにもその経済をドライブさせるためのしもべであった。だから計画はなかった。現象に後から追従して計画という言葉でものをつくっていただけ、というのが総合的な僕らの世代の評価ですね。

A氏 この10数年間、都市計画のほうはいろいろ新しいことを創造してきたのですか。

D氏 ないでしょう。

A氏 都市計画についても「失われた15年」というのは言えるのですか。

D氏 はい。

C氏 いま、国有地なり公務員宿舎をどんどん処分しているという話がありますね。でも、ああいう公有地をよりキープするという話をやらないと、日本のいまの土地は個人の所有権が公共公益よりも優先するという仕組みの中で、それをやらなかったら、将来、歯止めが何もきかなくなる。

D氏 私もそう思います。

C氏 交換の道具にするなり何なりそれはいいけれども、僕はフィンランドへ行ったときに、新しい市をつくると、そこは一生懸命公有地を拡大するという買い取りをやるんです。何かあったら買い取る。それで、将来それをタネとして地域計画をつくる。

D氏 それがあるから社会変動のタネにきちんと使えるわけですね。

C氏 時間をかけてでも、そういう政策をみんなが議論すると。

A氏 そもそも我々は「公有地拡大法」の中でずっと来ましたからね。

今野 いまのご見解そのものは、僕は全く否定する気はない、賛成なんだけれども、なぜそれがそういうふうになったかということ、日本人の社会というのは、地域概念もないし国家概念も弱いわけです。したがって政府に対しては国家と政府が混同されている、そういう形ですよ。これは司馬遼太郎の哲学に教わるところが多いですけどね。

C氏 いま景観の問題とか何かを議論しても、それをどう実現するか……、誰かがビルを建てる時に景観の議論が出てくるというだけの話で、街区や何かをどう整備するとか、地域住民にとっての資産価値がどう変わるとか、そういう目でものをとらえるという話はどこにも起きてこないでしょう。

今野 ただ、終戦まで、つまり日本の経済の中で米作りが主体性を持っていた時代までは、国家概念はともかくとして……、明治以降になって天皇制を利用して国家概念をつくって、天皇陛下万歳で死んでいったわけだけれども、それは人為的だから別として、自然的には村共同社会としての地域概念はあったわけです。そういう意味では空間概念を持っていて、壮烈な水争いの戦さだとか、隣の集落とのもめごとだとか、漁業権の争いだとか、あの歴史を見るとすごいですよ。血を流すのが当たり前で。

C氏 それは農業人口が35%以上あった時代だからでしょう。そこが壊れてきている。

D氏 いま、超高層マンションの分譲型マンションがいっぱいできています。これは、あるとき突然共同体をつくらざるを得ないときが来ると思うんです。つまり建て直しかいいうのが出ると、全員が共同体の一個の船に乗っているわけで、いまはみんなばらばらに入っているけれども、もしかしたら、それが都市の中で新たな共同体を生むタネになるのではないかという、ほのかな皮肉的な期待を持っているんです。

C氏 ただ、聞いている話では、例えば桜上水の団地は住都公団の最初の頃なのですが、あれが全部建て替えの時期に入っているんです。ところが、その合意形成ができない。みんな、「俺の生きている間は要らない」という感じなんです。

今野 僕の解釈は当たっているかどうかわからないけれども、戦後、高度成長の中で企業がすごく伸びたでしょう。地域社会に対する帰属意識が崩れてきたのを、いまになってみればかなり短期間だけれども、約半世紀近く、企業社会で支えてきたわけですね。ただしそれは、企業が大きく成長してそれなりのウェルフェアをやっただけでは成り立たないで、終身雇用制だったからですよ。終身雇用制が崩れてフリーターになってきて、ヨコの社会も崩れ、タテの社会も崩れてきているところがいまの問題で、親殺しだの子殺しが平気で起きてくる素地なのではないかなと思っているんです。

A氏 戦前は日本のブルーカラーというのは非常に労働力の流動性が高かったんですね。それだと高度経済成長に役に立たないからと、企業がむしろ労働者を長く勤めさせるという形で終身雇用をつくったわけです。それがだんだん逆で、いつでもクビ切れるようにしようという話で、企業のほうがまた変わってきているんです。その辺のきっかけが例の今井（敬）さんが会長の「産業競争力会議」で、あの辺で労働の流動性を企業のほうからも逆に求めてきたんですね。

さっきのお話に戻りますと、日本が何を望むかという、いま、政府は全く長期ビジョンを出せないけれども、唯一出しているのが「21世紀ビジョン」です。あれを見ると、どういうビジョンかというのはよくわからないのですけれども、「時持ち」の時代だと。あれはたぶん竹中平蔵が書いていると思いますが。ただ、あれで心が明るくなったと誰も思っていないのが事実で、何を望むかというのを日本人が求めないのか、それとも、政府がそれは僕たちの仕事ではないと思っているのか。確かに小泉さんも、竹中平蔵も、「ビジョンを出すのは政府の仕事ではない」と言っていましたね。だから、政府の役割が変わってきているんですね。

今野 これは極めて手近な話なんだけれども、立身出世した人、社会のために尽くして皆から尊敬を得られた人というのは、少なくとも我々みたいに戦前の教育を受けた世代では、大臣か大将ですよ。それが日本で一番偉いんだ、社会のために尽くしているんだと教えられてきた。ところが、いまNHKのテレビなんかを見ていると、一番偉い人は誰かといってスタジオに連れてきて拍手喝采を受けるやつというのは、みんな芸能人です。つまり個人なんです。社会のために尽くしたやつを偉いと評価するやつは誰もいなくなってしまった。

子供たちの希望を見ても、社会のリーダーになろうということを言う人は誰もいなくて、パン屋さんとか、芸能人かプロ野球選手、みんな個人なんですよ。

A氏 望ましい社会というのは、高齢者、老人に対してみんなが感謝するというのが非常に望ましい姿ですよ。自分たちがいま幸せな生活を送っているのも、年取って一生懸命やった方々のおかげだという形で、それでみんなが感謝する。年寄りとか貢献した人たちに対して感謝の念がない社会というのは、社会としては非常に寂しい社会になりますね。

今野 そうです。社会否定論というか、社会無視論になってしまっているで

しょう。個人の努力で、個人がやったことだけで何事もなければ、ある意味ではいい社会なんだけれども、人間というのはたった一人で生きているわけではないから、それで済むかという話がありますよね。「そこにいつ気づくのか」なのではないでしょうか。

A氏 日本人は宗教上の支えというのがないでしょう。それから地域のコミュニティが崩れていますし、企業というソサエティが完全に崩れました。そうすると、よって立つところが非常に狭くなってしまって、そこでおまえたちは希望を持ってといっても、どういう希望を持ってというのが非常に難しいですね。

今野 最低限は、自分の家族、女房子供をちゃんと守れということなんだけれども、それも言わなくなってきたのが、いま、尊属殺人がやたらと増えてきている基本なのではないでしょうか。

A氏 いま、日本人は何を望むかというテーマについては、それがないと本当は国土計画というのはいらないはずですね。その答えが見つからなければ、国土計画も必要ないとしてしまうのか。

いろいろな人類の歴史の中で、1960年代というのは最も幸せだったと言われているんです。ベトナム戦争はちょっとあったけれども、まず冷戦構造ということで、ある面で戦争状態だから、みんな国家に対して一体となっている。もう一つは、経済がどんどん成長して新しいものができてきた。戦争は全世界的には少なかった。そういう点でいくと、いまは冷戦構造が崩れてしまったから、国家というのは何かというと、自分たちを守る1960年代の国家ではなくなってきたわけですね。経済成長が進展しているわけではない、新しいものがどんどん来ているわけではない。そうすると国民は、国に何を期待するか……。

今野 それなのにアンケートをすれば、何かつきますよね。それはある種の衆愚主義の一つだと思うんです。

C氏 終身雇用制とか企業への帰属意識が強かったのは60年から80年までの間だけですね。その間に終身雇用制というのができ上がって、そこを過ぎたら変わったんです。

A氏 企業への帰属というのは、長い歴史の瞬間的なものだったかもしれませんがね。戦前は、人は組織への帰属という意識は薄かったでしょう。高橋是清なんか10回も仕事をかえているとかね。そういう点でいくとそもそも日本の中で組織への帰属とか、そこは非常に強かったんだけど、それは短い期間だったのでしょね。

今野 以上のことを総括すると、ましてや国家に忠実ななんていうのは、完全にはない社会になってしまった。そこが非常に特異だと思いますね、ドイツ人やフランス人と対比しても。

C氏 いま世界で起きている移民問題なんてあるのに、日本は全く無抵抗に、労働力が足りなかつたら移民を入れるという話をするでしょう。それでいてすぐれた文化とか何とか言っているけれども、これは文化が崩壊する話です。ドイツだって、いま、フランスだってあれだけめめ始めているのは、その危機感ですよ。いままでは入れていたわけです。

今野 まあ、超保守的考え方だなという感じもしないことはないけど。

A氏 では、一応ここで。

今野 それから国土審議会で、参考資料として「次期社会資本整備重点計画の今後の検討方向」というのが配られましたので、参考までに持ってきました。社会資本論の議論をすれば議論のタネになる素材だと思います。いま、社会資本について何を考えているかということがわかると思います。これは8

月13日に計画部会で配られたものです。

私からの検討素材提供は以上です。(了)